

2023年11月19日 礼拝説教要旨

ハイデルベルク信仰問答講解説教Ⅱ 23 「信仰義認」

ハバクク 2 : 1～4、ローマ 3 : 21～26

問59 それでは、これらすべてを信じることはあなたにとって今どのような助けになりますか。

答 わたしが、キリストにあって神の御前で義とされ、永遠の命の相続人となる、ということとです。

信じることに、無力さを感じる人もいらっしゃるかもしれません。神さまを信じていても何も起こらないではないか。けれどもイエスさまはからし種一粒ほどの信仰があれば山に向かって「あそこに移れ」と命じたらその通りになるとおっしゃいました（マタイ 17 : 20）。それは念力のようなものでしょうか。わたしたちの強い信心がそれを可能にするのでしょうか。どうもわたしたちは信仰を人間の業と理解する傾向があります。あの人は信仰が強いとか、あの人はまだまだだとか。しかしそのように人間の業として信仰を捉えている限りは、信仰はやはり無力なものでしかないでしょう。信仰が本当の意味で神さまの御業となるときに、信仰はわたしたちの助け、実効性のある救いになります。

信仰問答は、人間が義とされることに集中して問答を重ねていきます。ここに聖書の伝える神さまの救いの本質があるからです。聖書は、わたしたちが神さまの御前にいかに義とされるかを救いとして伝えます。罪を犯して壊れてしまった神さまとの関係をいかにして回復していくのか。この罪からの救いが人類の解決すべき最大の問題です。戦争も環境破壊もすべての原因は罪にあります。先日、手塚治虫の『火の鳥』の映画を観ました。悪のはびこる地球から新天地を求めて男女二人宇宙船で地球以外の星に行く。その星をエデンと名付けて再出発しようとします。でも結局また同じようなことを繰り返していくのです。罪が入り込んでその星も滅んでいきます。手塚治虫さんは旧約聖書物語も描いていますが、その作品もまさに創世記のアダムとエバの物語を彷彿させる内容でした。罪が解決されなければ、結局どこに行っても同じということでしょう。手塚さんは、作品を通してそういう人類普遍の問題を伝えようとしているのかもしれない。

人間が罪から救われ義とされることは、この信仰問答が書かれた宗教改革の時代も切実な問題でした。当時の教会の教えは救いを人間の業として捉える傾向にありました。ルター自身、人間の行いも救われるためには必要と考えておりました。しかしどんなに功績を積んでも、心の内側をご覧になれる神さまの御前にすべては明らかであって、その心の声、良心が自分を責めるのです。その心の声を信仰問答は言い表しています。

問60 どのようにしてあなたは神の御前で義とされるのですか。

答 ただイエス・キリストを信じる、まことの信仰によってのみです。すなわち、たとえわたしの良心がわたしに向かって、「お前は神の戒めすべてに対して、はなはだしく罪を犯しており、それを何一つ守ったこともなく、今なお絶えずあらゆる悪に傾いている」と責め立てたとしても、神は、わたしのいかなる功績にもよらず、ただ恵みによって、キリストの完全な償いと義と聖とをわたしに与え、わたしのものとし、あたかもわたしが何一つ罪を犯したことも罪人であったこともなく、キリストがわたしに代わって果たされた服従をすべてわたし自身が成し遂げたかのようにみなしてください。そして、そうなるのはただ、わたしがこのような恩恵を信仰の心で受け入れる時だけなのです。

わたしたちは良心さえあれば、人間は何とかやっていると考えるかもしれませんが。しかし良心は責めることはできても、わたしたちを救うことはできません。ここに人間の限界があります。わたしたちが救われるのは、人間の作り出す義ではなく、良心でもなく、聖書に啓示されている福音、イエスさまの十字架とよみがえりによってもたらされた神さまの義であり、その救いを信じる「まことの信仰」によって救われるのです。これが信仰によって義とされる「信仰義認」の教えです。パウロは「イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です」(ローマ3:22)と教えます。ルターもカルヴァンも改革者たちは皆そこに立ち返れと訴えました。イエスさまの救いこそ、わたしたちが御前に罪を赦され義とされる唯一の道です。「わたしは道であり、真理であり、命である」(ヨハネ14:6)そのイエスさまによる以外に救いの道はないのです。さらに信仰問答は言葉を換えてそのことを言い表します。

問61 なぜあなたは信仰によってのみ義とされる、と言うのですか。

答 それは、わたしが自分の信仰の価値のゆえに神に喜ばれる、というのではなく、ただキリストの償いと義と聖だけが神の御前におけるわたしの義なのであり、わたしは、ただ信仰による以外に、それを受け取ることも自分のものにもすることもできないからです。ここでもはっきり「わたしが自分の信仰の価値のゆえに神に喜ばれるのではない」と言います。信仰すら自分の手柄にしようとするわたしたちに釘を刺しています。「ただキリストの償いと義と聖だけが神の御前におけるわたしの義」となる。イエスさまの義をいただくこと。これを「義の転嫁」「喜ばしい交換」と言います。そしてその救いを受け取る信仰もまた神さまから与えられる賜物なのです。信仰問答では、この後、信仰はどこから来るのかと問うて、「聖霊が、わたしたちの心に聖なる福音の説教を通してそれを起こし、聖礼典の執行を通してそれを確かにしてくださる」(問65)と言います。そのようにすべてを神さまの恵みとしていただく時に、信仰は本当の意味でわたしたちの助けとなります。

今日はローマの信徒への手紙3章21節以下を読みました。冒頭21節に「ところが今や」とあります。これは前のところからの大きな転換を意味しています。わたしはここを読むと長いトンネルを抜けるような感覚を覚えます。九州道には宮崎に向かう途中6キロ以上ある長いトンネルが二つあります。これで九州山地を越えて行きます。今は二車線で一方通行ですからだいぶ走りやすいのですが、昔は一車線の対面通行でした。ただでさえトンネルは閉塞感があります。トンネルを抜けるとホッとしました。人間の救いもそれが人間の義、人間の業に閉じ込めてしまうのであれば必ず行き詰まってしまいます。いつまでも長いトンネルの中なのです。しかしイエスさまの償いと義と聖を信じて受け入れるとき、その信仰がその先の命へとわたしたちを導くでしょう。神さまの御業がそれを可能にいたします。

天の父よ。あなたの救いを人間の業の中に押し込めてしまう誘惑があります。けれども救いはすべてあなたから与えられるものです。イエスさまの義がわたしの義になる。この喜ばしい恵みをどうぞ素直に信じ、受け入れる信仰の心を与えてください。主の御名によって祈ります。アーメン。